

日本看護歴史学会 会報

日本看護歴史学会
第13号
1992年10月1日

緒に就く

武藤美知

第六回日本看護歴史学会に出席して多くの刺激を享けて帰った。歴史はおもしろい。最初の頃は知識を広げたいためにあれこれ資料を漁っていた学習段階から少しずつ歴史的事実に触れ、社会的背景が見えてくると一段と興味・関心が深く成ってくる。

そして「何か手懸けてみたい」と意欲も湧くがその道程を考えると立ち竦んでしまうのが常である。しかし、今だに関心も薄れず執着しているのは興味の尽きない分野である故に、歴史セミナー・歴史学会へと足をはこび新たな人おもしろさVを仕入れたい所以である。緒に就くと書いた。それは事象のはじめに何があったのか、起

りの意図はどうであったかを知ることに、明らかにすることが歴史の学びに欠かせないからである。

日頃の目まぐるしさに気持ちを奪われていると「はじめありき」も「いとぐち」も見い出せないまま問題意識に振りまわされて客観的視野を狭くしてしまふ、十数年も歴史学会に結ばれていると、識者の成果に触れておのずと見方も育まれてくる。

今回も亀山・吉川両氏の発表で日本の近代看護、とりわけ看護事業・看護教育に「緒」をもたらした二人の人物史を紹介され驚きの中で聞いた。

亀山氏は「日本最初の看護婦大関和物語」を、吉川氏は「佐野常民

の生涯と赤十字看護教育」がテーマであった。

大関和の個人史は今まで「日本近代看護の夜明け」で知り得た範囲であるが六十二編に及ぶ参考資料、大関和を今ここに具現するかのようにならぬ直接足を運んでの聞き取り、個性の強い才色兼備の大関和像に更に何が加わるのか興味津々たるものがある。

緒に就いた人のはたらきには強靱な心のバネが必要であり仕事の成果はその人の生きた証しでもあるが、大関の心のバネは御一新での人心一変の混乱を家族とともに経験した時に国家老であった父の言葉と出自の誇りであろうか、いずれにしても亀山氏によって歴史発見があるにちがいない。

佐野常民イコール博愛社（日本赤十字社の前身）の創設者という一般的な理解に立っているが、吉川氏は赤十字看護教育に着目した佐野常民をどのように発見して我々に示してくれるのか、興味のあるところであって楽しみである。

『石黒忠憲 懐旧九十年』に看護婦養成の始りは相当な苦勞があったと述べられている。

殊に石黒子爵が陸軍軍医であった当時、自分の職分は兵隊の母たる任務があると自覚して傷病兵が

重態になった時に女性のやわらかき手で看護するのではなければ親切な用意周到な看護は出来ないとして陸軍官憲では看護婦の養成はまだ出来ないの日本赤十字社で養成し、戦時・平時にも重病者に看護婦をつけるという計画をもっていた。

すでに高木兼寛によって有志共立東京病院で看護婦養成が始められていたこと、日本の国際赤十字条約加入・赤十字社の創立を機に篤志看護婦人会が組織されたこと、看護婦養成事業が「緒」に就いたと述べている。しかし、看護婦養成に尽力したのは橋本網常・高木兼寛医師と石黒子爵自身であった佐野常民の名は登場していない。赤十字社創立の中核委員であり社長職でもあったことからどのような関与のしかたで看護婦養成に着目したのか、理想の看護婦像を描いていたのか知りた。

吉川氏の卓抜な資料発掘によって百年前の事のはじまりが明らかになる日も近い。

日本看護歴史学会が緒に就いたのも亀山・吉川氏の功績大であることをつけ加えたい。

第六回大会報告

代表幹事 亀山美知子

第六回大会は八月二二日の内海孝東京外大助教授の講演が好評のうちを終了。続いて定期総会が開催されました。審議事項中、来年度の活動方針として、一昨年より引き続き研究者としての基礎を築くための体制づくり、および昨年の保健婦五〇年に関連し、保健婦史に関する史料集積のプロジェクト設置について検討すること等が提案され、承認されました。

また、既報のとおり来期の幹事選挙の実施が確認され、三名の選挙管理委員の選出と承認が行なわれました(別項参照)。

尚、会報第一二号および七月二五日付号外で発表できなかった大会第二日目の会員による研究発表は左記のとおりです。

「佐野常民の生涯と

赤十字看護教育」

吉川龍子

「大関和の伝記をまとめるまで」

亀山美知子

※同日の昼食会では会員、非会員の別なく自己紹介等で交流を深めることができました。

分科会報告

渡部 尚子

高橋 みや子

六分科会開催し、各分科会では話題提供に引き続き、研究に関連したさまざまな意見交換がなされました。その概要を報告します。

一 近代看護史救世軍と社会事業

― 医療・看護活動を中心に―

話題提供者 小山千加代

参加者は四名。①英国における救世軍創立の社会的背景 ②日本における救世軍創設活動の開始と医療・看護活動開始までの経緯

③救世軍の医療・看護活動・教育の概要について報告。救世軍が伝道活動の手段として軍隊組織をとったのは何故か?大正六年開始の看護教育の実際は?等が検討された。

今後の課題として

①救世軍が軍隊組織をとった理由を明確にする ②看護婦養成の意図と教育の実際を調べることがあげられた。

二 ナイチンゲールの我が国への

受容

話題提供者 吉川 龍子

参加者は十五名。①ナイチンゲールと日本の看護職者や一般の人々との関係に関する先行研究の報

告 ②ナイチンゲールの受け入れ

られ方の時期に関する検討 ③ナ

イチンゲールの受容について報告。

受け入れられ方の時期は、一次、

日赤の岩井等の文書、伝記に現れ

る「とり入れの時期」と二次、Noggs

on Nursingの出版以降、ナイチ

ンゲールの本が読み初められた時

期に分類できるのではないか?研

究の課題と視点、研究方法等が検

討された。

今後の課題として ① Noggs on

Nursingの日本語訳の変遷を何時

から、何故という視点でみる

②受容の概念を明確にする等があ

げられた。

三 日赤の看護―昭和初期の看護

技術教育

話題提供者 山本 捷子

参加者は六名。日赤の昭和初期

の看護(救護看護婦養成所)の実

態に関する聞き取り調査結果の報

告。日赤病院の特殊性や当時の医

療レベルからみて手と眼をかけた

ベッドサイドケアが中心であった。

しかしながら、徒弟的、模倣的訓

練であったため、年次を経るにし

たがい技術がその本質を失い形骸化して行ったと変化の経緯が報告。

今後の課題として ①他の日赤

病院の看護・技術・教育はどのよ

うなものであったのかを明らかに

する。②女性史の視点から、日赤

の看護教育史をとらえるとなつた

るか等があげられた。

四 現代看護史―アメリカ帰国後

十年を顧みて

話題提供者 大村 春子

参加者は五名。①地域と接点を

もった看護活動として地域女性グ

ループとの関わり・高齢者グルー

プとの関わり・外国人看護婦の会

への関わりをあげ、具体的活動と

して、神奈川の女性史編纂・高齢

者グループへの健康教育とグルー

プ活動の場として自宅の開放・厚

生省や県とのパイプ役等が報告。

②日本の看護婦へ、看護婦本来の

看護の仕事をするために看護管理

の検討が必要。看護教育を受けた

者として社会に還元すること、病

院に勤務しなくともその立場から

社会に役立つことが必要と提言。

五 看護教育史―看護技術にみる

清潔

話題提供者 高橋 典子

参加者は九名。国立国会図書館

所蔵看護関係図書二十八冊(内訳

明治時代十五冊、大正六冊、昭和

